

企業の枠組みを外して 子どもたちと接して行く

有限会社村田堂 取締役 長屋博久

「創業者になったつもりで、日夜夜を引き締めています。」と語るのは、学生服専門店の有限会社村田堂・取締役の長屋博久さん。村田堂は明治22年の創業以来、一貫して学生服の販売を行ってきた京都の老舗であり、創業当時から師範学校や京都帝國大学をはじめ、同志社大学、立命館大学など伝統校を手がけてきた実績を持つ。オフィスの壁には当時の制服やボタンなどが飾られ、今もその風格が漂っている。このような環境の中でも「老舗という看板に囚われないで、自分のスタイルで創業する気持ちを大切にしたいですね。」と、新たなビジネススタイルを模索し

ている。

大学卒業後は大手生地メーカーである日本毛織に就職し、主にカーベットの商品開発に携わる。当時、業界ではベットポトルを再生して製造した繊維など、エコ素材を使った商品が声高に叫ばれていた。しかし、やはり多くは企業の営利を目的とした「売れるための商品開発」の一環であり、表面上ではリサイクル可能な繊維素材を使った商品と謳っていても、回収まで責任を持ったリサイクルの仕組みとはほど遠いものであった。「自分が売るものは、きちんと後始末を付けないといけない。」と想った長屋さんは、11年間勤めた会



社を退社し、家業の村田堂を継いで、リサイクルシステムの実現を積極的に検討している。

とにかく、市民活動、NPO、個人、企業など、様々な環境活動をしている人たちに会い、色々な意見や活動内容を見て聞いていこうと思った。その中で出会った一つに、(社)日本繊維機械学会・繊維リサイクル技術研究会がある。ここでは、ボロ布を機械でほくして綿状にした反毛(フエルト)を原料とした板木を使って、船を作るプロジェクトに参加した。そして、「リサイクルの現状を伝えることが必要だ」と感じていたところ、繊維商社の知人



創業時に作られた制服のボタン

から誘われて、LEAFによる環境学習に企業として参加するようになった。学校での環境学習に参加して聞いたことは、各々自分たちが企業人であることとはさておき、本気で3R(リデュース・リユース・リサイクル)を提唱しようとしている姿だった。また、自分たちの会社で行っていることの中には、実は環境に良くないこともあるのだから正直に伝える姿に打たれた。こんなことを伝えると、会社の首を絞めること

になるかも知れないのに、未来作りのためには子どもたち一人ひとりに考えてもらいたいという皆の姿勢に、自身、奮い立つものを感じていた。

現在、長屋さんは自社の納入先の学校に対して、衣服を通じた環境学習を提唱し活動している。また、村田堂として「商売」という枠組みを外した活動をしていくための準備に取り掛かり始めている。そのさきかけとして、学校内での制服のリユース活動に協力した(新入生の新規購入を除く)。制服の回収や提供など無償でおこなったこのリユース活動の中で、使い古された制服の着用状況や痛み具合などを一着ずつチェックしながら、在校生の「替え服」として再利用されていく制服の姿を見届けていると、企業としての新しい社会的役割が見えてきたという。

西宮市で行ったこのプロジェクトの行政と教育、企業との三位一体の連携に感動し、このような仕組みで京都市でも活動したいと思っている。「衣服を通して「人を育て」「人を創る」ことは、

社訓ですから」と語るその視線の先には、次の世代を担う子どもたちたちの姿が映っている。



学文中学校での授業

有限会社村田堂

創業年：1890年(明治22年)
 代表者：代表取締役 長屋 吉彦
 業 種：繊維製品小売業
 (学生服、その他ユニフォーム販売業)
 住 所：〒604-0812
 京都市中京区高倉通二条上る天守町744
 TEL：(075) 231-1593
 FAX：(075) 231-1888
 URL：http://muratado.co.jp